



浄土宗中興の祖 了誉聖岡上人

みなさんは、了誉聖岡上人という人物をご存じでしょうか。教科書や歴史の表舞台にはめったに登場しないため、大半の方は聞き覚えがないかもしれませんが、「二十六夜尊」「ろくやさん」の呼び名を聞いたことがある方は多いと思います。了誉上人は、室町時代前期に活躍した僧侶であり、中世において、浄土教学の体系を整備し、浄土宗の地位を確立させたことから、「浄土宗中興の祖」と称えられてきました。江戸時代には、「偉いお坊さんといえば了誉上人」と言われるほどでした。そんな上人、実は常陸大宮市域で生まれた人物で、彼にまつわる幾つかの伝承が現在まで伝えられています。今回は、上人の生涯を辿りつつ、現代に伝わる伝承について紹介します。

【了誉上人の生涯】

了誉上人は、暦応4(1341)年に常陸国久慈西郡岩瀬城(現在は誕生寺)の城主である白石志摩守宗義の子として、上岩瀬で誕生しました。佐竹氏の一族として生を受けました。当時は南北朝の動乱の最中で、上人が5歳のとき、父親である白石志摩守が戦死し、岩瀬城は落城してしまいます。その後、貞和5(1349)年に瓜連の常福寺で出家し、修行生活を始めました。そして、25歳を過ぎた頃、日本全国の名僧を訪ねてさまざまな宗派の学問や教義を学ぶ旅を重ね、帰郷後は下野国(現在の栃木県)や下総国(現在の茨城県南部・千葉県北部)で浄土教学や念仏を民衆へ広める活動を行いました。また、執筆活動に取り組み、浄土教学に関する多くの著作を残したほか、聖総上人(増上寺を開山)をはじめとする弟子の育成にも力を注ぎました。晩年には、江戸小石川の草庵(現在の伝通院)に隠居し、応永27(1420)年に80歳でその生涯を閉じました。

了誉上人が「二十六夜尊」などと呼ばれるのは、上人の没日が旧暦の9月26日だったことに由来しています。そのため、常福寺では、毎年この時期になると盛大に法要を執り行っており、大宮地域の人々は、「ろくやさん」と呼んで参拝するならわしが浸透しています。

【現代に伝わる了誉上人の伝承】

了誉上人の伝承は古くから散見され、有名なものは、江戸時代の怪談『番町屋敷』で、夜な夜な皿を数えるお菊の亡霊を鎮める人物として上人が登場して

います。これは、上人が当時から高名な僧として有名だったためと考えられますが、実は本市周辺にも、上人にまつわる伝承が残されています。

1つ目は、下岩瀬に鎮座する春日神社の境内脇に位置する鏡ヶ池の亡霊を鎮めた伝説です。源義家に滅ぼされた長者屋敷の娘である朝日姫は、逃れた下岩瀬の神社で屋敷再興の祈願をする際、池に落ちた鏡を拾おうとして足をすべらせ溺れてしまい、その後、悪霊となって人々の前に現れるようになります。この亡霊を鎮めたのが了誉上人とされています。

2つ目は、了誉上人のもう1つの呼称である「三日月上人」に関する伝説です。三日月上人の名の由来は、上人の額に三日月形の傷のようなものがあつたという言い伝えに因っていますが、南北朝の動乱が激しくなり、上人が松栄地区の洞穴(現在の常陸太田市、香仙寺直牒洞)で浄土教学を研究していた際に、額の三日月から光を発して本を読んだという伝承が残されています。現在残る上人の像にも、額に三日月形が刻まれています。

【注目される了誉上人】

令和元(2019)年は、了誉上人の没後600年にあたる年となっています。そのため、神奈川県立金沢文庫や増上寺など、各地で了誉上人に縁のある品を展示する企画展が行われ、大きな注目を集めています。

本市でも、令和元年12月1日(日)に了誉上人没後600年を記念して、上人に関する講演会と企画展を実施する予定です。本市出身の僧である上人の業績はもちろん、上人の生誕地である岩瀬地区がどのような土地であったか、中世まで遡って触れていく予定となっていますので、お誘い合わせのうえ、ぜひ来場下さい。



▲了誉上人像(誕生寺所蔵)

〈参考文献〉

- ・『大宮町の民話』大宮町教育委員会、平成4年
- ・鈴木英之『中世学僧と神道 了誉聖岡の学問と思想』平成24年

■問い合わせ■

文化スポーツ課 文化・スポーツグループ
☎52-1111 (内線344)